

植田辰洋先生を偲んで
In Memory of Professor Tatsuhiko Ueda

丸山 茂夫 (東京大学)
Shigeo MARUYAMA (The University of Tokyo)
e-mail: maruyama@photon.t.u-tokyo.ac.jp

植田先生がいらっしゃると時間が静かにゆったりと流れました。いつも穏やかでニコニコされていた先生のイメージのままに、2014年4月18日に90歳で亡くなられたと奥様から電話を頂きました。先生のご遺志でご葬儀は親族のみで執り行われたと伺い言葉を失いました。

ちょうど1年前の2013年4月20日には、植田先生が数えて90歳を迎えられ、植田・田中研の同窓生の「植田先生と奥様を囲む会」で、卒寿のお祝いをしたところでした。先生は、「肺ガンと診断されて、いろいろ考えたけど、何もしないことにしたよ」と淡々とおっしゃっていました。この時も言葉を失って、手にしていた赤ワインをぶちまけて先輩方に大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。

1984年、私が植田・田中研の修士1年を終わるときに植田先生が退官されていますので、研究室で直接ご指導いただいたのは1年間だけだったはずですが、ずっと長く植田・田中研にいさせて頂いたように思えてなりません。1988年に田中宏明先生が若くして他界されたこともあり、植田先生にも植田・田中研の先輩方にもずっと可愛がっていただきました。植田・田中研の同窓生の勉強会である「機械技術サロン」は、1992年から毎年2005年まで14回が行われ、会議のあとは「植田先生と奥様を囲む会」が行われました[1]。2006年からも「植田先生と奥様を囲む会」は続き、昨年4月20日の楽しいひと時に至りました。工学院大学の小泉安郎先生（その後、信州大学、現在は日本原子力研究開発機構）と東京海洋大学の刑部真弘先生がずっと幹事をされ、花岡正紀さん、荒井康全さん、谷口博保さん、秋吉一雄さん、波江貞弘さんを初めとする皆さんに色々な局面でお世話になりました。

植田先生は1924年3月2日に岡山県でお生まれになり、1947年9月に東京帝国大学第一工学部機



植田辰洋先生(1924-2014).

械工学科を卒業され、次いで1949年9月に東京大学第一工学部機械工学科大学院を修了され、同年12月に東京大学講師（第一工学部）となり、助教授を経られて1960年12月に東京大学教授（工学部）に昇任し、機械工学科第一講座を担当し、1984年4月に定年退官をされております。1954年4月には、『噴流ポンプに関する研究』で東京大学から工学博士を授与されています。東京大学退官後は、工学院大学工学部機械工学科に移られ、1991年3月まで在籍されました。東大にいらっしゃるときに、「委員会などの学外の仕事は退職したらするといって極力断っているんだ」とおっしゃっていました。東大と工学院大学の退職後はその通りにボイラ関連のJIS規格や便覧などに関わる安全基準などの仕事に力を尽くされました。

植田先生のご業績につきましては、沸騰二相流の後継者である小泉安郎先生の受け売りが多いことを最初にお断りします[2]。植田先生は高度成長



「機械技術サロン」と「植田先生と奥様を囲む会」(2009年5月16日, 東大山上会館)

期の日本の工業界を見据え、ボイラなどのエネルギー機器に関わる実学にこだわりつつも、気液二相流の学問体系の基礎を築かれました。

植田先生が東大において研究を始めた当初は花形産業であった繊維産業と関係する繊維の乾燥のご研究をされています。その後の蒸気エジェクタの研究からボイラなどのエネルギー関連の研究に移られています。1966年10月から1967年10月までは、UC DavisのWarren H. Giedt先生およびMITのWarren M. Rohsenow先生の研究室に海外出張され、帰国されて二相流の研究に本格的に取り組みられました。相変化伝熱をとまなう気液二相流に関する研究をまとめられた著書『気液二相流一流れと熱伝達』は、本分野のバイブルといえる内容であり、すべての図や数式の詳細にまで徹底してこだわられています。これらのご功績に対し、日本機械学会論文賞を初めとした多くの学術賞、また、便覧や規格規準のまとめへのご尽力等に対し、科学技術功労賞、通産大臣表彰を初め多くの表彰をお受けになっています。

実学的な研究にこだわりつつも、沸騰二相流におけるドライアウトやリウエッティングの研究においては、ミクロスケール・ナノスケールでの壁面での濡れや相変化現象の物理についてよく議論されていました。私の分子動力学法、フラーレンやカーボンナノチューブなどの研究についてもずっとサポートしてくれていました。ちなみに、植田先生が海外出張されていたMITのRohsenow研究室は現在Gang Chen教授が引き継いでおり、私と同様にナノスケール伝熱の研究に注力していま



「植田先生と奥様を囲む会」、植田先生の卒寿のお祝い。(2013年4月20日, 東京自由が丘)

す。いずれは植田先生がずっと気にかけていたエネルギー問題に貢献できるようにとの思いを強くするところです。植田先生は、夕方になると学生のいる研究室にいらっしゃり、修士1年生がコーヒーを入れることになっていました。小泉先生によると学生が緊張する瞬間とのことでしたので、先生も若いころは厳しい一面があったものと想像されます。私の知る植田先生はずっと穏やかそのものでした。先生の静かなご冥福をお祈りいたします。

参考文献

- [1] 刑部真弘, 機械技術サロン ホームページ, <http://www2.kaiyodai.ac.jp/~osakabe/page022.html>
- [2] 小泉安郎, 植田先生を偲んで, 混相流, 2014年6月号.